

桃色吐息

幹事の岡本が三度目の七面鳥の真似をしている。

「だからさ、わっと驚かすとね。ぐるるるるって逃げていくんだよ」

初回のインパクトは薄れていたが、アルコールのおかげでまだ一部の女の子から笑い声上がる。岡本は気をよくしてさらにぐるるるるるを繰り返す。

「ねえ、サオリ、獣医学科の院生たちなんだけど、どう？」

どういうコネがあつたのかは知らないが、ロツカールームで素子に誘われたのは先週のことだった。相手方は五人。獣医だつて医者仲間だ。

高学歴、高収入は間違いない。

「いつ？」

「来週の金曜日」

香港で買ったルイ・ヴィトンの手帳を出して一応予定を確認する。彼なし歴早くも一年。今月は何もあるはずがない。

「いいよ。空いてるみたい」

サオリは二十四歳で結婚する計画だった。それが今相手が見つかったとしても、式までの準備期間を半年とすると、二十五歳だつて危うい。高校からの腐れ縁でキープになつてゐる男もいるが、結婚となるとだいぶ覚束ない。自分でも転職したくなるような会社なので、社内結婚の線は絶対になし。そうなるとあつという間に二十七歳。売り時を逃した惨めなサンプルは目の前にいくらでも転がつてゐる。いやよ。冗談じゃないわ。

週末、美容院に行つて髪の色をわからない程度に一段階明るくした。当日は久々の朝シャンでサラサラに仕上げた。ふわりとコロンの香りがする。使い捨てコンタクトを新しい袋から取り出して眼の中に入れる。くつきりとした二重瞼の眼にはちよつと自信があつた。ラウンドカラーのブラウスにピンクのスーツで装備を固めると、コートは迷つた末にあえてフェイクファーの物を選んだ。もしかすると自然保護の話に使えるかもしれない。

「ペットドクターになるのは三分の一くらいなんですよ。あと三分の一

が県の畜産局とかで公務員。残りは民間の会社に就職してサラリーマンですね」

山形県出身という田沢は標準語を話しているが、ネにニを混ぜたような音がまじる。今時珍しい黒ぶちの眼鏡をかけて、口元からは金歯のぞいていた。

「俺たち生き物を相手にしているし、実習先が田舎でしょう。なかなか都会で合コンなんてできる環境にないんですね」

そのせいか獣医の卵たちは純情そうな青年ばかりだった。イケメンは一人だけ。隣の隣に座っているが、さつきから素子がガツチリとガードしている。自己紹介した時に宮脇と名乗ったはずだ。テーブルの反対側では、岡本が動物農場の真似を全部やるつもりらしい。サオリはしかたなく白ワインを飲みながら田沢の話聞いていた。

「俺の場合は長男だし、田舎帰って牛や豚を診れたらと思うんだけどね」
素子がトイレに立ったのを見て、サオリも立ち上がった。いよいよ最後の切り札を使う時が来た。

「ごめん、もう終電なの」

テーブルの奥から抜け出す時、サオリは宮脇の前に立ち止まると、相

手の目を覗き込みながら小さな声でいった。

「宮脇君、そこまで送ってくれない」

「……ああ、いいですよ」

宮脇は店の玄関までついて来た。やった。あと一押し。素子ごしに何
度か視線を感じたので脈ありと思っていたのだ。

「他の人には悪いけどちょっと雰囲気変えたかったの。外に出ない」

「……うん、いいかもね」

作戦成功。コートを羽織って宮脇が付いてきた。よく見ると藤木直人
に似ている。こいつはかなりの当たりだ。素子には悪いけど、仁義はあ
とで切らせていただきます。

新宿西口に廻って高層ホテルのバーに入った。

「何にする」

「ベリーニ」

「じゃ、僕もそれ」

ピーチジュースをシャンペンで割ったカクテルは、少し歩いて上気し
た身体に心地よかった。

「家は横浜で病院やっっているんですよ。でも二浪しても医学部に入れなかったし、どうせ兄貴が継ぐのわかっていたから……」

「思わずよだれがこぼれ落ちそうになるのをグラスを口に含んで誤魔化す。おかげで中身を飲み干してしまった。」

「お代わり？」

「うん、でもあまり飲めない方なの」

「本当はベリーニが大好きでいつか五杯くらい飲んでみたいと思っていた。しかし、高いのでホテルのバーで試す訳にはいかない。この手の家柄の男に強引なのは禁物。ふと感じた酔いにサオリはそう思って気を引き締めていた。」

「今、何時かな」

「とつくに自分の時計は外してある。さりげなく相手の左手に触れて腕時計を眺めた。おっ、ブルガリだ。時間は十二時を少し過ぎている。横浜に帰るとするとぎりぎりの時間だ。ここからが神経戦。先に動いた方が負けになる。気のせいかな宮脇も落ちつかなくなっていた。」

「ちよつとトイレにいつてくる」

置き去りにされたかと思うほどの時間がたって宮脇は戻ってきた。
「出ようか」

エレベーター前に立つ。

「あの、これ」

宮脇がおずおずと何かを差し出した。ホテルのキードロップのついた鍵が揺れている。

「ふーん、宮脇君ってそういうことするんだ」

誘ったのはそつちよと駄目押しをする。返事の代わりに相手の胸もとに頭を寄せる。ほのかにコロンの香りがするはずだった。

部屋で二人きりになると、コートも脱がないうちに抱きついてきた。

「ちよつと待ってよ。もう少し大切に付き合いたいのに」

「もう、強引なんだから……」

ベッドに押し倒されて身体がバウンドした。腕がはずれてペンダントライトに照らし出され、お互いの顔が見えた。

「あれ、どうしたの」

「えっ」

宮脇が不思議そうに顔を覗きこんでいる。

「眼が真っ赤だ。充血してる」

「ええっ」

あわててバスルームにかけ込んで鏡の前で調べた。真っ赤だ。毛細血管が膨らんで両眼とも充血している。

「細菌感染ではないと思うけどな」

後ろで宮脇がいう。バカね。サオリは胸の中で毒づいた。お酒とコンタクトと深夜の合併症よ。そういえば一次会でもけっこうワインを飲んでいたっけ。最初は抑えていたけれど、途中からピッチが上がって……。急に酔いが襲ってきたような気がした。

「初めてウサギの解剖をした時のこと思い出したよ。死ぬ時すーっと眼から血の色が消えていくんだ」

こんなところでそーゆーこといかな、こいつは。ハンドバッグを掻き回してコンタクトのケースをさがす。だめだ。完全に潮が引いていった。

「僕、悪いけど先に帰るね」

「ちよつ、ちよつと待つてよ……」
策士、策に溺れる。いや、酒に溺れた。

ロツカールームで素子が寄つてきた。あれからしばらく、お互いになんとなく敬遠していたのだ。

「今度、結婚することになったの」

「おめでとう。よかつたわね。相手はどんな人」

「サオリの知っている人よ。宮脇君」

「嘘……」

「獣医の卵つて卒業まで本当に忙しいらしいの。彼つたらすれてなくつてね。私が初めての女だったのよ……」

素子の声が耳元からどんどん遠ざかつていった。なぜ見抜けなかつたのか、サオリ。なぜ喰わなかつたのか、サオリ……。代わりにどこからか湧き上がるような声が聞こえてくる。

半年後、宮脇と素子の結婚披露宴が横浜の中華街で開かれた。二汁八菜の豪華な広東料理の後に桃の形をした饅頭が出てきた。寿桃包子とメ

ニューには書かれている。桃って本当は幸福のシンボルだったんだ。サオリはつまみ上げてつくづくと眺める。

「今度山形に来てくれませんか」

田沢が唐突にいい出す。

「うん、いいよ」

自分でも意外な答えが返っていた。でも、こいつの金歯だけはなんとかしなくては。

サオリは桃の菓子を一口頬張った。